

し、一切を許す愛の永遠の創造によりみがえろうではないか。愛は、実在があるがままに正しく見ることから流れ出る。そこで、われわれに次のことを教えてくれるのも、また愛である。すなわち、われわれ——個別的に言えばわれわれのひとりひとり、集合的に言えばわれわれのすべて——は、善にあれ、悪にあれ、この人間社会に行なわれることの一切に責任がある。だから、われわれは、人類の福祉と智慧の全体的発展を妨げるような条件を、ことごとく改善もしくは除去するように努めなければならないのである。」と。

みなさんこの大獅子吼に世界の人類は熱心に耳を、そして心を傾けるべきではなからうか。

このたび、駒沢大学において、このような意義ある国際的な仏教学会を開催され、世界的にも時宜に適うテーマを選ばれた事に深い敬意を表すると共に、このたびの成果が、池中に落とす一適となって、その波紋がひろく世界中にひろがることを切に望んで止みません。

韓国における葬墓制について

金 永 晃 (禪晃)

はじめに

韓国人にとって墓地というのは、祖先崇拜を意味するといっても言い過ぎではない。封墳式墳墓形態は韓国の墓の特色であり、伝統的な風水地理説を採り入れた習わしである。もし、他人の所有林野といっても一旦墓地が造られれば、刑事上、民法上、法律の保護の下に置かれて、他人の墓地をかってに毀損することはできないのが社会的慣習である。全国土面積九万八、九九二km²に散在している既存墓地は、一九七八年保健社会部で実施した墓地実態調査を根拠として、一九八六年全国に造成された墓地を推定して見ると、およそ、一八、五八四、〇〇〇基である。その中、子孫がなくなっている無縁墓地がおよそ七〇〇万基であると報告されている。これは一九七八年以来、毎年約二二万五、〇〇〇基程度が増加したことになるが、土地の用途に関係なく全国土面積一ヘクタール当り約二基の割り当てである。特にソウル周辺の場合、全国の総墳墓数の約二七・七％を占めているので、面積と比較すれば一ha当り約四・四基に当たる。都市地域を除外すれば一ヘクタール当り約一・七基であるということになる。それがまた、半永久性

をもっているのである。

韓国では一般的な概念として日本でいわれる土葬を埋葬というが、現在韓国の墓の実情を見ると、国民の八〇％が埋葬による葬儀を行っており、火葬率は一八％に過ぎない。もちろん、人口が増えずある現代社会において墓地（埋葬）の問題は深刻である。土地利用の効率化面においても、墓地による全国土の侵食は大きな問題である。一九八三年「韓国における墓地問題が改善できない最も根本的な問題は何ですか」というアンケート調査に対して、「従来の慣習及び風水地理説に対する国民の思考」と答えた人が全体の六一・三％で一番高い数字を示した。一九九一年四月には民間レベルで、韓国・金泰福教授（土地行政学）、日本・藤井正雄教授（宗教人類学）、台湾・殷章甫教授（地政学）を中心として専門の諸学者を招いて「墓地政策公聴討論会」を開いたことがあるが、このことは最近、韓国社会が抱えている墓事情の深刻さを物語っている。

本稿では、風水の思想と土葬による葬墓制を中心として、その信仰性・思想的背景を考察することにする。

一、仏教と風水

仏教が伝来したのは、高句麗第一七代小獸林王二年（三七二年）である。『三国遺事』巻第三には、「小獸林王即位して二年壬申の歳、前秦の王符堅より使者及び仏僧・仏像・經典が送られた」と述べている。又同書によると、百済においては第一五代枕流王即位甲申の歳（三八四年）に胡僧摩羅難陀が晋から来たのが仏教の始まりであり、やや遅れて新羅には第二十一代毗仇王の時に伝えられた。この時代は三国鼎立の時代であり、それぞれの国では護国仏教として仏法を信ずることによって国運を盛んにし、三国を統一しようとする政治的現世利益的な願望が強くはたっていた。中世以降になると、朝鮮（韓国）仏教は特に風水信仰と緊密に結びついて、この三国国々の支配階級から庶民まで、すべてにおいて風水思想が盛んになったのである。

次に、その代表的な一例をあげて見よう。

新羅の名僧慈藏法師は、入唐して始めて大藏を伝来した人であるが、五台山に到り文殊の現身に感応して授訣し、新羅に九層の塔を建立するように神人の命を受けた。『三国遺事』巻三に、皇龍寺丈六・皇龍寺九層塔の文、巻四に慈藏定律の本伝がある。九層塔の文に、

「新羅第二十七善徳王即位五年、貞観十年丙申（六三六）。慈藏法師西学。乃於五台威文殊授法。文殊又云、汝国王是天竺刹利種王、預受仏記。故別有因縁、不同東夷共工之族。然以山川崎嶇山故、人性驕悍、多信邪見、而時或天神降禍。然有多聞比丘在於中国。是以君臣民安泰、万庶和平矣。言已不現。……神人云、今汝国以女为王。有徳而無威。故隣国謀之。宜速帰国本国。蔵問、帰郷将何為利益乎。神曰、皇龍寺護法龍、是吾長子。受梵王之命、来護是寺。帰本国、成九層塔於寺中。隣国降伏、九龍来貢。王祚永安矣。建塔之後、設八閤会、赦罪人。則外賊不能為害。更為我於京畿南岸、置一精廬、共資予福。予亦報之徳矣。言已、遂奉玉而献之、忽隱不現。

……」

と記している。

慈藏法師は貞観一七年に帰国し、建塔を善徳女王に上聞し、貞観一九年乙巳に塔が完成した。この皇龍寺九層塔は、慈藏法師が五台で授けられた舍利百粒を柱中に分安し、第一層は日本、第二層は中華、第三層は呉越、第四層は托羅、第五層鷹遊、第六層鞞鞞、第七層丹国、第八層女狄、第九層鐵洎と、遠近諸国よりもたらされる災いを鎮めるべく高々と建立されたのである。寺塔の建立の後には天地安泰し、その靈蔭に因るものか、三〇年経たないうちに、事実、文武王八年（六六八）に三国統一が実現したのである。「仏舍利と地氣（龍脈）と造塔に現われた裨補の三者の集合による功德なり」と信じられたのである。^{〔1〕}

この立塔護国の信仰は、仏教伝来と共に中国から伝来されたものであることは、慈藏法師が帰国の後、建塔を上聞韓国における葬墓制について

したという前掲の記事にも想像されるが、この時代と時を同じくする日本においても国分寺を建て、又、この国分寺に塔を建てて国の鎮護とした事実などから考えても、この建塔信仰が仏教によって伝えられたものであるが、風水信仰とも結びついたことはいうまでもない。

六六八年新羅は三国を統一したのであるが、特に新羅末に出た道説（八二七～八九八年）は風水の宗師として仰がれるほど、風水に長じたといわれ、先覚国師と封号された名僧である。一五歳で祝髪し、二三歳で受戒して仏道に励み、後に全羅南道白鷄山玉龍寺に住した。新羅第四九代憲康王の宮中に入って玄言をもって君心を開発したことがある。新羅危亡を感じ、松岳郡に遊んだ時、高麗世祖（太祖の父）の門をよぎり、「この地まさに王者を出だすべし」と予言し、又、「後二年、必ず貴子を生まん」と断定したという。太祖は九三六年に新羅に代わって統一したのであるが、これより先の九一九年には都を地理風水の勝地松岳郡（開城）に移していた。高麗の国基は道説の風水の予言に負うことが大であったのである。この道説の地理風水術の師承に関しては二つの伝承があり、一つは入唐して一行法師から授けられたとするもの、一つは玉龍寺碑文にある老風水師からの伝授とするものである。この二説を要約すると、

「朝鮮には山が多く且つ險阻であるから、その感孚する所自然に乱気立ち昇りて國中に満ち、人民この乱気の感化によって争いを好む。古来の九韓・三韓・三国の争いは皆この乱気の顕露であり、山川の大脉の調和せざる為である。故にこの乱気を鎮めて天下を太平ならしめんがためには、指点せられた三千八百処に建寺立塔して地脉を輝め裨補をなされば、国家は一統し、民物殷盛となること疑い無し……」ということである。

高麗太祖がその子孫に遺した誠めであると称せられる『訓要十条』の其二によれば、多くの寺院は皆風水僧道説が山水の順逆を考えて開創したのであり、然るにその配置は国土の要所要所に定められたのである。この開創は結局、地徳を盛んならしめる為にしたものであるが、建寺立塔が地徳を盛んにするからといって、無闇にこれを増設しては、

あたかも新羅の末葉に競って塔を立てた為、かえって地徳を衰損してついに滅亡した如く、国運厄頻にするから、濫りに建寺、立塔をしてはならないといっている。原文を挙げると次の如くである。

其二曰。諸寺院皆道説推_二占山水順逆_一而開創。道説云、吾所_二占定_一外、妄加_二創造_一、則損_二薄地徳_一、祚業不_レ永。朕念後世国王公侯妃朝臣、各稱_二願堂_一、或増_二創造_一、則大_レ可_レ憂也。新羅之末競造_二浮屠_一、衰損地徳_一、以底_二於亡_一。可_レ不_レ戒哉。（高麗史卷二）

前記した「裨補塔」とはいかなるものであろうか。裨補とは地力を補うことであり、地占上の欠点のある場所を補助することである。例えば、北方からの風煞をさける為に風水塔を建てたり、樹木を植えたりすることがそれである。人為的に裨補してその風水をより良くすることが可能であれば、逆にまた自然の好い風水を人為的に破壊することも可能であろう。朝鮮朝明宗朝（一五四六～一五六七）の時、名僧普雨和尚が広州修道山奉恩寺に住するに、僅か十年間にその風水の地徳の致すところから仏法が大いに興隆して王家の帰依も厚かった。排仏不義であった当時の儒者達はこの勢いを見て甚だ忌嫉していたが、普雨和尚の死後、奉恩寺の主山（後山）を切断して首に当たる地点を祛り、鷄帖村にある案山を掘り開いてその足を除き、以てこの地に集まる地気を漏洩して仏道の興隆を妨げようとした事例が『朝鮮仏教通史』に見えている。

また、風水信仰の利用においても、韓国特有の民族性と歴史があったのである。風水の研究家であった金孝敬は「朝鮮仏教寺院選地に於ける風水信仰の影響」という論文の中で、次のように論じている。

正しく朝鮮仏教の特色は風水信仰との結合その影響下にあったことである。而してこれは朝鮮仏教の荷負ふべき当然の任務であったのである。恐らく朝鮮の社会に於いて中世に仏教が風水信仰と結びつかなかったとしたら、仏教の有つ護国思想と云ふものは仮有であり虚偽であり、真実には仏教は護国的ではないと云うことになり、従って移植発展は見られなかったであろう。風水信仰殊に、陽氣信仰はその最大そして最後の理想は国家安

寧国祚永遠にあるのである。(第二節)

このことは、韓国における仏教の受容においても、風水信仰がいかにして展開したのかが窺われる。特に、このような背景の中で、高麗時代(九一八～一三九二)には国家的イデオロギーとして、朝鮮時代(一三九二～一九一〇)には秘訣信仰として発達したのである。

二、墳墓と風水

三国を統一した新羅は「崇仏・重儒」政策を併用したので、自ずと遺骸処理方法も仏教式(火葬)・儒教式埋葬(角墓・方墓)とならざるを得なかった。ところが、新羅末期に至り後漢の思想界を風靡した識緯説と唐僧一行の地理識緯説が入ってくると、その思想に基づいて遺骸を埋葬する風が盛んになっていった。僧道説の陰陽地理説と風水地相法は高麗・朝鮮王朝を通じて大きく影響を及ぼしたことは前記した通りである。

諸学者による風水の定義を二、三挙げると次の通りである。

牧尾良海博士は、「風水思想と仏教」(『仏教文化論集』、第二輯)の中で、

風水とは「人が都城・寺院・居宅・墳墓などを構築するに当たって、予定地点の環境を形成している大自然の形勢や方位、流線の有無及びその態様、地表下の精氣(龍脈)の優勢・吉凶、全局面における陰陽調和の程度等を観察判断し、能うかぎりの各種の好条件を具えた勝境を求める理論と方法を含む思想の体系」である。また、デ・ホーロートは、

「風水は、準科学的な組織であり、死者や神霊や生人が自然の好適な影響力のもとで、専らに、若しくはできるだけ永くそこに居着くことができるようにするために、墓とか寺院・居宅をどこにどの様に造るべきかを人々に教示するものと想像されている組織を意味するものである。」(J. J. M. De Groot: The Religious System of China CHAPTER W. p. 935)と述べており、この思想の本地である中国の説を参照して見ると

「堪輿家は相するに、何を以て之を名づけて風水と曰や。蓋し地を見るに、首めには竜を重んず。竜は即ち山脈の気なり。気の来るや導くに水を以てし、気の止まるや限るに水を以てす。葬は生氣に乗ずるなり。風無ければ即ち氣聚なり、風有れば氣散ず。此れに因りて陰宅地理は首めに得水藏風を重んずるが故に風水と称するなり。水に固より吉凶の分有り、風あれば即ち更に陰宅の禁忌となる。縦ひ真竜の穴有るも一たび風吹を経なば、軽ければ即ち損を招き、重ければ即ち竜穴も頻に化して棄地とならん。地を相するに、形勢を偏重して理氣を忽略にすること能はざる所以なり。是れに由りて知る、古時の堪輿の大家は、特に風水の二字を揚げて標題と為せることを、蓋し深義の其の間に存する有りて、後学をして先務する所を知らしむらん。」(上海星相研究社輯編「星風水秘伝」下編、六〇頁)と風水の特長を記している。

古代人にとって自然は、人間の生命のみではなく、人間の運命を支配する靈妙な力をもつものと考えられていた。人間は自然に順応し調和していかねば、大自然の神秘的影響力と摩擦し、いずれは滅ばねばならない。それゆえに、この調和の仕方によって、人間の命運の吉凶禍福をもたらすと考えられたことは当然である。より積極的にその調和を意図し、その影響力を期待することは当然な成り行きである。農耕民族における一番重要なテーマは天と地、すなわち天父(Sky Father)と地母(Earth Mother)に対する敬拝である。しかし、今日、自然が世俗化されて誰も山(土地)、もしくは天に神が存在すると思わなくなっても、土地に対する執着、故郷に対する愛着、愛国心などが残っている。天は包括的であるが地は局地的である。天は規則性、支配、崇拜の対象であるが、地は生命を維持扶養してくれる愛される対象である。農民であれ軍人であれ、地に結びついた守護神への信仰は重要であった。これは中国人のみならず、ギリシア、ローマ人の場合も同じであった。ギリシアの軍人は犠牲の供物を捧げて川を渡り、ローマの農夫は、木、泉、土地に対する信心(Pietas)を捧げたという。(Martin P. Nilsson, 1940. Greek Popular Religion, Columbia Univ. Press, p. 10)。

これに対して、中国の場合は土地と穀物の神である社稷神に対する態度が揚げられる。死者の靈魂はある種の力をもつ。特に英雄と聖者の埋葬地は聖所である。森は中国では女神に帰属され、山は神の居住地であり、ある所は英雄が埋葬された場所として神聖視される。自然との調和を保ちながらその恩恵を享受しようとする考え方は、風水も同じ原理である。

風水説は、自然の中に旺盛に生動する生氣を取り、それに感応することによって人間の吉凶禍福がもたらされるといふのがその根本思想である。個人もしくはその血族が隆盛・衰退する原因が自然の生氣（地氣）をどれくらい得られるかによって左右されるという自然生氣論に根拠がある。言い換えれば、偉大な人物は山川の生氣により生まれるということが風水の基本思想である。国家が隆盛する為には、当然王家が居住する王都の地氣が旺盛な場所でないければならないというのが王都風水である。個人の血族または家門が隆盛する為には、地氣が旺盛な場所に家を建てるといふ理論が陽氣風水であり、その血族または家門の隆盛が祖先の遺骸を地氣のある所に埋葬するという思想が陰宅（墓地）風水である。

しかし、風水の經典ともいえる『青鳥経』⁽⁶⁾『錦囊経』⁽⁷⁾には地氣の存在に関する記述は皆無である。それには、言うまでもなく土地・自然には独自の生命力があるという原始的アニミズム（Animism）⁽⁸⁾的思想が背景にあるからである。

自然生氣説は、土地地氣説とともに風水説を形成する重要な理論の一つが感応論である。感応とは、生氣を受けるという意味である。生氣が旺盛な場所に王都を定めれば、その生氣により国家の国運が隆盛になるのが感応であり、祖先の遺骸を地氣が強い所に埋葬すれば、遺骸が受ける生氣がまたその子孫に感応するというのが感応論である。

風水の起源は、紀元前四世紀の戦国時代まで遡るという。しかし、今日に伝わるような形での風水体系化が進められたのは唐代に入ってからのことであると推測される。唐代中葉のものとされる『錦囊経』では「氣」の流れが一体

の竜身に比喻され、人間の吉凶禍福に影響を及ぼす氣の凝聚（この地点を穴という）と拡散のありさまを、地上の景觀（形、勢）⁽⁹⁾から見分ける術が述べられている。

風水という言葉は、風水地理説の最初の經典ともいわれる『青鳥経』に見える用語として、すでに漢代以前から一般的に使われた用語である。大唐国師楊筠松の『青鳥経』註には、

「陰陽符合天地交通内氣萌生外氣形成内外相乘風水自成」と見えている。（傍点筆者）⁽¹⁰⁾

特に、風水の意味を正確に説明したのは郭璞の『錦囊経』である。

風水の本質は生氣と感応の二つであるが、古代中国地理説、風水説がその本源であることは言うまでもない。陰宅の風水は血と肉は早く腐って、骨は永遠に保存が可能となるところが理想的風水の適地であるといわれる。また、骨に対する信仰はそれだけではなく、骨の影響が子孫に繁栄を保証すると信じられている。一族の子孫が繁栄することは先祖の墓の為であり、一族の子孫の没落も先祖の墓の為であるとするのである。すなわち、埋葬した屍体の骨が地下の生氣を得てその墓の主、もしくは血族に影響をもたらすという信仰である。陰宅風水の地理学的解釈は親子感応理論であるが、生氣によるこの親子感応の俗信が風水に結びついて風水信仰を形成したのである。

『錦囊経』は『青鳥経』をもとにして著作されたといわれている。このような風水信仰が、新羅時代より高麗時代に入ってからより利用されたのである。高麗時代は知識に限られたのに対して、朝鮮時代には社会各層に広く普及して民間信仰として地位を占めたのである。朝鮮朝で編纂された最初の法典である『経国大典』によれば、「礼典陰陽科」の試験科目の中、地理学として風水に対する經典である『青鳥経』及び『錦囊経』を取り入れたことは、当時、如何に風水を重視していたかが窺われる。⁽¹¹⁾

風水において大地の生氣哺育力は、土砂それ自体ではなく、地下を流れる生氣である。その生氣の有無を確認して場所を定めることが最善のことである。『青鳥経』及び『錦囊経』が葬書といわれる由縁は、陽氣風水より葬法を扱

う陰宅風水に重点をおいたからであり、地理風水といえば、まず「墓地地相法」を連想するからである。

風水の基本思想は、郭璞が言っている葬乘生氣の原則にあるので、生氣が流れる生竜（山脈）を求めて場所を定めて生氣が流れない死竜を避けるのが風水の原則である。次に、風水では父子の間に密接な関わりがあると信じ、父母が子孫の幸福と不幸をもたらすと信ずる。同じく父母の遺体と子孫との間にも密接な関わりがあって、父母の遺体が地下の生氣に触れれば父子の間に感応が生じて生氣の効果が子孫に与えられるのである。

特に、陰宅風水の主な要点は死体を埋葬することによって、生氣の感応を求めようとするのである。風水はより積極的な感応、すなわち骨を通じてその子孫の繁栄を図ろうとする作用、活用である。これが同期感応の理論である。このように遺体と地下の生氣の間に生氣感応と父子の間における同期感応が風水の第二本質を為す感応論である。骨が地氣を得て子孫の繁栄を望むという觀念は『青烏経』及び『錦囊経』も明白に語っている。つまり、「百年幻化。離形帰眞。精神入門。骨骸返根。吉氣反応。累福及入」という『青烏経』の骨骸反応説、もしくは「本骸得氣。遺體受蔭」という『錦囊経』の本骸得氣説の觀念である。

生氣信仰とは土地に対する信仰であるが、祖先の遺骸が土地の生氣を得られると、その延長者である子孫が繁栄するという継世思想である。古代農耕社会では収穫祭として天地神明に対する感謝祭があった。それは穀霊信仰に基づく農耕儀礼である。穀霊信仰はその中核に、死と再生の穀霊の神秘がある。したがって、穀霊の觀念は祖霊の甦り觀念と融即的關係にあるものである。ここに農耕儀礼と祖霊祭とのつながりがある。このことについて、三品彰英は「古代乃至原始農耕社会では、人間霊と穀霊とは融即的に取扱われ、従って死者の霊祭りは、穀霊祭儀と共通的に実修せられるのが一般的である」と述べている。穀霊信仰は古来の民族的祭儀であり、農耕儀礼であり、慰霊祭を伴う総合的な祈禱祭でもあったのである。人々が墓に関心があったのはこのような穀霊信仰に基づく継世思想である。生氣信仰は地理学的立場においても注目されるが、土地に対する信仰としても重要である。特に高麗時代（九一八～一

三九二）と朝鮮時代（一三九二～一九一〇）には中国から風水説が伝来して一世を風靡したのは前記した通りである。

風水は漢武帝の時、堪輿家の地理説に基づくものと知られるが、韓国において風水の確立は、新羅末僧道詵によるものである。高麗太祖王建の相宅・安都・創寺などに風水説を適用したのであり、朝鮮朝の李太祖も風水説を信じ、僧自迢（無学）の助言を得、国土と陵地を定めたこともあり、朝鮮朝は高麗朝に比べて風水説の流行はさらに盛んで王家はもちろん、一般民衆も殆どこれに従わない者はなかった。こうして韓国人たちは古くから墓地（陰宅）を住宅（陽宅）よりも重要視したのである。祖先を生氣があるところに埋葬すれば、これら吉氣感応により子孫に福をもたらすと信じて来た。このことについて、村山智順は『朝鮮の風水』（朝鮮総督府編）の中で、韓国墓地風水の五つの特長を述べている。

- (1) 朝鮮風水は中国から伝来したもの。
- (2) 風水は土地の生氣の感応を重要視したので、自然的に墓地風水が重要視された。
- (3) 墓地風水の普及には仏教の影響が大きいという事実。
- (4) 既に、朝鮮人の信仰の中で死者の骨が生者に影響を及ぼすという信仰があった為に、墓地信仰として早く受容されるようになった。

- (5) 祖先の墓が子孫に福をもたらすという信仰の為に、これを利用して幸福を追求しようとして風水を方便化した。

この中で、(4)(5)は風水以前の韓国人の信仰があったのはいうまでもない。生氣信仰は後に、中国の風水説と習合され、風水信仰として一般に馴染んでいるのである。もちろん、風水信仰は韓国の異なる思想または宗教との関わりの上で考察するのが妥当であろう。

儒教を国家の根本理念とした朝鮮時代、また仏教を国教とした高麗時代に国家試験の科目としたのは、儒教または

仏教という信仰・教理とは別のものと考えられていたことを意味する。当時はそれが地理書であり、易理・易学として科学として信じていたのである。このような理由で鬼神信仰を否定する儒教にも受け入れられ、仏教にもまた習合され、当時の知識人が教養の一部として受け入れるようになった。

三、韓国の葬墓制の理論的背景

風水はどの民族の原始信仰にも共通する地母思想によるもので、すでに述べたように宅地を維持することによって、居住者の繁栄を期することが出来、墓地の氣を得ることによって死者の子孫の繁栄を望むことが出来るという思想である。そこには儒教の倫理の大本源である「孝の思想」が背景にある。「孝」とは、親の生前ばかりではなく、死後を通じて孝養をつくることが子孫にとつての最大の義務として要求せられていた。竜脈が旺盛であり、陰陽の氣が調和している吉地に祖先もしくは両親の屍体を埋葬すれば、神靈は死後も相変わらず自然の好影響を受け、その家の保護神として子孫に幸福と繁栄をもたらしてくれるという、極めて現実的・実利的な考え方がもたらしく強く働いている。実際に埋葬した後にも風水が適してないとして複葬（改葬）をしたり、あるいは立派な人の墓地にひそかに暗葬することもある。風水に通じた墓地に埋葬したい為、他人の骨と自分の父母の骨を入れて訴えられるという墓地争訟の事例も多かった。¹⁶⁾祖先崇拜と深い関連をもつこの墓地風水は基本的には土地に埋められた祖先の骨がその土地の生氣を受け、子孫が繁栄するという風と水に対する自然条件による信仰である。

風水の基本原理は、土地の中に流れる生氣が充満するところを探す過程と方法論である。最も生氣が充満するところが真穴であり、その真穴を探す原理が風水の原理である。しかし、生氣とは言葉で表現できる概念ではない。その適地を探すということが至難なわざであって、『山法全書』には生氣を探すことを「禪（生氣）——門猶釋氏之有禪單刀直入便得仏頂三昧」に比喻して單刀直入に仏頂三昧を得ることと同じであると説いた。¹⁷⁾最も重要なものは、第一に、

山を選ぶ基準もしくは方法論であるが、生氣が集った竜脈を探す方法を看竜法という。第二に、風を遮る方法である藏風法。第三に水を求める得水法である。第四には、吉地を選ぶ方法としての占穴法の四つに集約される。この四つの要素が陰陽五行説と互いに相乗的に作用して一つの局を形成するようになる。

民間習俗の中では、原始時代から物体の形相が人生の吉凶に影響されるという「類似信仰」の習俗があるが、風水はこの類似信仰を採用して生氣説を具体的に説明しようとした。伝説的獣である青竜、白虎、朱雀、玄武が東西南北、もしくは前後左右の方向を守護してくれるということでもともと守護星辰の名として『呂氏春秋』、『淮南子』、『天文訓』、『史記』、『天棺書』その他、『緯書』などに記録が見えている。したがってこれは中国の天文思想が後に風水の穴処四方の山勢（砂）の考え方に採り入れたものとして考えられる。

韓国における四神獣信仰は、すでに風水伝来以前の三国時代まで遡るが、高句麗、百濟の墳墓壁画上の四神図がこれを証明する。因みに葬書によれば、四神砂（穴の周囲の山勢のこと）¹⁸⁾の位置が「左青竜、右白虎、前朱雀、後玄武（夫葬以 左為青竜、右為白虎 前為朱雀 後為玄武）」として、穴が南向、すなわち子坐午向をした場合、東が青竜、西が白虎、南が朱雀、北が玄武になるのである。

墳墓の造営は、王室の墳墓と平民の墳墓に分けられるが、国王・王妃・太王妃の墳墓を「陵」と称し、王世子・王世子妃・王世孫・王世孫妃・嬪王の私親（王の生父母）の墳墓を「園」と称し、その他は皆、墓という。また、前朝の陵墓を「歴代陵」といって、朝鮮時代の陵墓と区別している。

高麗時代になると、儒教が盛んになり埋葬の風習が広く行われたが、その末期の頃のは火葬も盛んになされた。しかし、火葬は屍体から骨を早くとり出す手段として、単純に埋葬の先行手段の一部に過ぎない場合があった。したがって、厳密な意味では火葬といえる特別な葬儀はなかった。また、火葬の後、散骨する方法も行なわれたが、それは子孫がない場合で、子孫があった場合には火葬してその骨を埋葬することによって祖先祭祀を可能にしたのである。

火葬は新羅・高麗時代においてはかなり広く行なわれたが、朝鮮時代に至っては儒教が仏教に代わってその勢力が強くなるにしたがって祖先崇拜の觀念から遺骸を長く保存するのが親孝行の義務となり、親の屍体を火葬するのが儒教の倫理では許せなかったで、これを禁止したのである。

しかし、その時代の火葬は西方浄土信仰からではなく、屍体の肉が腐って骨がのこる期間を短縮する為である。その觀念の為に屍体が早く腐敗できる場所が望まれる風水説が歓迎された。韓国西南海地方における「草墳」という洗骨葬法があるが、これは最も骨を大事にする葬法である。「草墳」は一時的に屍体や棺は地中に埋めずに一定期間地上に置き、二次的に骨を埋める葬法である。この場合、第一次葬は屍体処理の葬法として、第二次葬は遺骨処理葬法として屍体が完全に腐って骨だけが残った後、改葬（再葬）するのである。それは儒教における教えである「親孝行」の問題もあるが、それ以上に、風水による父母の陰宅（墓所）を探す間に、草墳（仮葬）をすることに關係するのである。この背景には洗骨することによって、その遺骨は浄化された憑依体（ノッパジ）となる。その遺骨が埋葬された墓を管理することによって子孫と祖先の關係を継続維持しながら子孫は家門（一族）を繼承することになる。つまり、子孫が繁栄することによって、祖先は継生復活するという信仰である。現実一族の系譜を表すものとして、最も重んじられている「族譜」が存在している。

終わりに

以上、韓国における葬墓制の背景に横たわっている風水説と、その信仰的内容を略述して見た。墓の問題は、これから韓国社会が抱える大きな問題である。ここでは膨大な風水説を論じるつもりではなく、むしろ、風水の展開に伴いその信仰性がどのようなものであったのかを論じた。本稿では風水説が韓国に伝わって、どのように変容してどのように習合された来たのかに焦点を当てた。風水が韓国社会に及ぼした一つの実験体系は、仏教という博大な思想

体系には比較するほどではないが、その影響は実に甚だしかった。今は風水説が歴史の遺物になったような感があるが、その理論体系より、それは民族性の形成に大きな役割を果たしたのである。つまり、韓国民族の人生観・運命観ないし宇宙観と密接に相応して来たのである。

韓国における葬墓制は単なる葬送儀礼ばかりではなく、一つの宇宙観をもっている。葬送儀礼に関する原始的觀念は、死は生まれる前のところに帰っていくことであり、葬送儀礼とは大地（母体）に復帰する儀礼、または究極的にそれと関連された再生觀念である。この大地への復帰觀念・再生觀念により、これをよく説明するのが風水説であり、その宇宙の表現が葬墓制なのである。

（この論文は、第五〇回日本宗教学会発表の再構成したものである。）

註

（1）牧尾良海、『仏教文化論集』第二輯、川崎大師教学研究所編、昭和五二、一〇・二二・一九七頁

（2）村山智順、『朝鮮の風水』朝鮮総督府編、国書刊行会、昭和六二・四・二〇

（3）一行は密教系統の僧侶である。燕国公張説と共に曆象陰陽五行説に精統した人物として、唐開元一六年（A・D、七二八）玄宗の勅令で張説と僧泓師と一緒に郭璞の葬經を註釈する時、形勢説明において実証法を用いて風水論理の画期的な転換点を確立した。

（4）『仏教研究』第四卷、第三号、大東出版社、昭和一五・七・一〇

（5）讖緯説は、中国古代の予言説である。讖は予言を意味し、緯は經書に対する緯書の意である。古くからの予言説としては、ト筮・占星・陰陽五行説・曆数・曆運などがあるが、このような予言説が急速に發展したのは、王莽の漢王朝纂集、ついで後漢光武帝の即位などの政治的事件に巧みに利用されたからであった。したがって、後漢の思想界にはこのような説が著しく横行し、学者はこれによって經書を解釈した。しかし、やがてその盛行が民心をまどわし、内乱の原因となると注意されはじめから、これを禁止したといわれる。

韓国における葬墓制について

(6) 漢代の青烏子が著述した『葬経』である。著者の名を取って『青烏経』というが、最初の風水の理論書として風水説が体系的な理論は網羅されている。風水の大経典である。

(7) 『錦囊経』は晉の郭璞が著述した『葬経』である。彼は東晉の学者で字は景純、山西省出身である。彼は晉の元帝(A、D、三一七～三二二)の時に重用され尚書郎になり、彼の博学文名は「中興之冠」という称譽を承ったという。著作には『爾雅注』『江賦』『穆天子注』『山海経注』等がある。

彼の著作である『葬経』を『錦囊経』と言われる由縁には次の逸話がある。唐の玄宗は風水説を深信して、当時地理家の大家である泓師を招致して山川の形勢に対して下問した。この時、泓師は答えることに郭璞の『葬経』を引用して説明した。それで、玄宗は泓師に郭璞の『葬経』をもってこさせるように命じた。泓師は同書を玄宗に献納した時に、この『葬経』は天下の珍宝であるので人に見せてはいけない秘宝書であると強調したので、玄宗はこれを特別に作った錦囊の中に入れて文庫の中に秘蔵して誰にも見せなかったという。それで、郭璞の『葬経』を『錦囊経』といわれるようになった。

(8) Animism とは、靈魂などの靈的・超自然的である神秘的力により、自然と人間に重大な影響を及ぼすという原始的宗教観である。すべての存在には靈魂(ラテン語の Anima)があるという觀念に基づいた信仰。

この Animism を原始的生氣論(Vitalism)といえるもので、すべての存在には独自の生命があり、それは大地と直結しているという思想がその根源を成しているからである。

(9) 『錦囊経』は開元十六年(七一七)の序によれば、僧一行らが郭璞『葬経』に解釈を加えたものという。『錦囊経』は『新刊地理全書郭璞錦囊』(東洋文庫蔵)による。なお、前掲の『朝鮮の風水』に詳しい解説がある。気の聚集、離散については、例えば、「本文」古人聚之使不散、行之使有、故謂之風水。(註)張曰、聚生氣於穴中、得法之多也。使之不散、則無風吹也。行之使有止、謂前必有水、以止來氣、使穴中之生氣不流故也。『錦囊経』上・氣感第一。

(10) つまり、「経曰く、氣乗風則散、界水則正、古人聚之使不散行之使有止、故謂之風水、風水之法、得水為上藏風次之」は『青烏経』の一部を引用している。

(11) 『経国大典』卷三、礼典諸科の中で陰陽科があるが、陰陽科は天文学・地理学・命科学を含むものである。その中で地理学が風水に当たる部分である。風水の重要経典としては『青烏経』『錦囊経』『胡舜申』『明山論』が知られている。

(12) キリスト教は、現世と来世を厳格に区別して死後は天国、もしくは地獄に行くと思われている。このような死生観を来世

思想という。これに対して仏教では人間が死んでも靈魂は生まれ変わる(還生)という。このような思想を輪廻思想という。これに対して韓国人の死生観は、現世と来世を同一次元として考えるのでこれを継世思想という。

邊泰燮、「韓国古代の継世思想と祖先崇拜信仰」(『歴史教育』第三輯、一九五八年七月号)参照、韓国人の死生観が継世思想であることを指摘している。

(13) 三品彰英、「古代朝鮮の祭政と穀靈信仰について」、『史林』第二十一卷、一〇二号、京都、一九三六。

(14) 堪輿家を風水家ともいう。墓地を選定する時に、その地質の吉凶を判断して凶を避け、吉に就かしめることを専門とするものであることを指摘している。

(15) 古代オリエントの地母神、または生殖神崇拜が広く行なわれたのは、B・Russell の名著『A History of Western Philosophy』の中で、「埃及およびバビロニアの宗教は他の古代諸宗教と同じくその根源は生殖崇拜であった。大地は母であり、太陽は男性である……」バビロニアでは Ishtar という大地女神が、すべての女性神の最高位にいて西アジア全域に渡って「偉大なる母神は色々な名称で崇拜された」。(前掲書、二三頁)

(16) 旧韓末の刑法大典においても、同法典の半分以上が墓地、又は墳墓に関する取締り規定であった。

(17) 『山法全書』卷之首上、(生氣)

(18) 『高麗史』(卷八五、刑法志)の恭讓王元年(一二三九〇)上疏に、近世。火葬。不仁甚矣。とあって、これを裏付ける記録が見えている。